

環境教育のあり方を考える  
- 理性で行動するのがヒトか? -

佐藤 修

はじめに

ヒトは、多量の資源を食いつぶす地球上の怪物となるに及び、地球本来の自然システムの変化に直面している。環境教育はこのような状況の中で、ますます重要性を増している。

環境教育の主目的は、ヒトの生命維持が危惧される現状を打開すべく、学び、考え、行動することとされる。このため、理性的な面を強く打ち出さざるをえなかったが、ヒトの生物性、身体性を軽んじては、環境教育の成果は上がっていかないのではないだろうか。

1. ヒトは地球が生んだひとつの偶然

ヒトは極微細な細菌から、数十億年の間のさまざまな生物史を歩み進化してきた、いわばひとつの偶然の産物であるといえよう。多数の生物と同じ遺伝子も保持している。

一万年前までは、自然の恵みに支えられ、環境によって生かされているという感覚は、おそらく皆共通にもちあわせていたに違いない。

このように、ヒトは、地球環境に支配されて生まれた生物であることを、われわれはしっかりと心に刻み込むべきではないか。この記憶が、地球自然や他生命に対する“気づかい”“慈しみ”“畏敬”などの感情をわれわれに根づかせる力となると思われる。

2. ヒトは感性、感情がかなめ

環境の悪化や緑地空間の蚕食は、ヒトが知能優先の社会へ没入していったことの、当然の帰結といえる。現代は、知能 = 大脳皮質（理性脳）に過剰の期待をかけ、依存しすぎている。

脳の中心部にある大脳辺縁系（情動脳）や基底核の脳（反射）は、大脳皮質より古く、歴史の重みを有している。にもかかわらず、歴史の浅い大脳皮質に過度に依存し、その影響が深刻化しているのである。

幼児期からの知識詰め込みにみられる脳の酷使は、ヒトとしてのまともな成長を阻害している。

ポール・マククリーンは、大脳皮質、情動脳、反射脳の三位一体の活用を提唱している。彼は“泣き”“笑い”“遊び”は情動脳の支配下にあるが、発生を伴う前言語活動でもあり、他への共感、ウィット、創造的冒険に進化する理性脳の働きの前駆活動だとしている。“泣き”“笑い”“遊び”がヒトの情動として非常に重要であり、環境教育も大脳皮質に依存しすぎるとは、今までと同じ轍を踏む可能性が高い。

3. 環境教育はどうあるべきか

教育 ( education ) の語源は educe = 潜在しているものを引き出す、ということであるため、酷使されている知能を解放し、ヒトが本来有している能力を引き出すという意味の言葉としてとらえたい。したがって、環境教育は、ヒトと環境が接する感覚器官の豊かさを引き出すことに重点が置かれるべきで、情動脳に主眼をおいていると考えたい。

学校での環境教育の現状は理性脳が一方的に酷使される傾向が強いようであるが、理性脳の十分な働きを支えるためにも、基本的な感知能力や情動を引き出し、育てていくべきである。

生涯教育としての環境教育では、どのライフステージにおいても直感、情動的体験がかなめであり、基盤となる必要がある。

キーワードは心身の「解放」、環境との深い「共感」と「コミュニケーション」である。

環境教育は“感強”教育を中心に据えるべきであろう。

### おわりに

環境教育は、一言でいえば、本来備わっている心身の機能を回復することではないだろうか。そのためには、ヒトの体表面にあるさまざまな感覚器官の機能を引き出すことがまず求められる。環境との自由な交流、交感が生まれれば、環境教育の成果は十分達せられたと考えられる。

環境教育は、現代社会の病理をいやす、潜在力を秘めており、ヒトの本質的な問題をも問いかけている。いまこそ、教育関係者のみならず、さまざまな分野の意見を出しあい、その中身を広く議論すべきであろう。

### 参考文献

ポール・マククリーン(1994) 三つの脳の進化・工作舎・東京, 311p.